

2010年度 大学コンソーシアム京都 第16回FDフォーラム

『組織的FDの取り組み～FD義務化から現在(いま)～』

日 時： 2011年3月5日(土) 13:00～3月6日(日) 15:30
会 場： 京都外国語大学 1日目：森田記念講堂 2日目：1号館
主 催： 公益財団法人 大学コンソーシアム京都
報 告 者： 池田 秀彦(法学部) 飯田 順三(法学部) 小島 信泰(法学部)
高橋 正(文学部) 杉山 由紀男(文学部) 鈴木 将史(教育学部)
池口 雅道(工学部) 石井 良夫(工学部)

新任教員研修プログラムの構築と実践

池田秀彦(教務部長・法学部教授)

2011年3月5日(土)、6日(日)に2010年度コンソーシアム京都第16回FDフォーラムに参加した。

5日は、13時15分から17時まで、シンポジウム『組織的FDの取り組み～FD義務化から現在(いま)～』が開催された。シンポジスト・テーマは、平山弓月(京都外国語大学外国語学部教授)「FD(教員研修)」、木野茂(立命館大学共通教育推進機構教授)「FD実践(授業改善)」、山田剛史(島根大学教育開発センター副センター長・准教授)「アセスメントの効用」、池田輝政(名城大学副学長・理事)「FD戦略という視点」であった。

冒頭、コーディネーターの高橋伸一(京都精華大学共通教育センター長・人文学部教授)から、シンポジウムの開催趣旨が「FD委員やFD担当が、学部や学科におけるできればやりたくない仕事のナンバー1であったり、各年交代の持ち回りの仕事である限り、大学人が実質的なFDを主体的に獲得することはできない。FDを教育の未来や創造性に通じる興味深い活動として捉え、大学の教職員が主体的にFDを引き受けたいと思うような考え方はないのであるか。FD義務化から3年目の現在、原点に立ち返り、『組織的FD』について焦点を当て」ることにある旨の話しがあり、シンポジストの話しはそれぞれ興味深いものであった。ここでは、特に木野茂教授と池田輝政副学長の話についてふれることとする。

木野教授は、まず、教授自身のこれまでのFDへの取り組みについて述べ、これからの大学授業においてはパラダイム転換が必要であると幾度も力説した上、「授業改善のために組織的FDは必要か?」という問いを掲げ、これに対して次のように述べた。

「ユニバーサルアクセスの時代を迎えて、大学授業のパラダイム転換は不可欠。そのためには、個人の努力だけでなく、教員同士の協力(組織的FD)が必要。授業FDは、どれが特

効薬というわけではない。授業FDのそれぞれの効能を知った上で、採用する。学生の声を受けない授業改善は教員の独りよがり過ぎない。授業が学生にどう受け止められているのか、授業の達成目標がどのくらい実現しているのかを知らずして、何から手をつけるべきかを判断できない。学生の声を受けないということは学生の声に振り回されるということではない。学生の声に対して教員が自らの考えを返すことで、はじめて双方向のコミュニケーションが成り立ち、むしろ授業や教育の質を高めることができる。そのためにも教員同士の協力(組織的FD)が必要」。

また、「授業改善のための組織的FDを楽しむコツは？」との問いについては、「まず自ら授業改善に取り組む→学生とともに作る授業を目指す→主体的・能動的に学ぶ学生を育てる→授業が双方向型になる→学生から刺激を受ける→教育研究への意欲を増すことができる」と述べた。

さらに、立命館では、従来、授業アンケートの自由記述欄については、センターで不適当なものは削除した上、学部長に渡し、学部執行部でさらに検討した上、不適当なものは教員に返却しなかったが、来年度から授業アンケートの自由記述欄は廃止することにした。理由は、自由記述欄が授業改善に効果があるか不明だからだと述べた。

池田副学長は、名城大学のFD組織、長期に及んだ責任者として感慨について述べた後、「これまでの大学教育において、学びというのは学生の言葉、教えるというのは教師の言葉というように役割分担が存在していた。しかし、高等教育がマス化、ユニバーサル化した現在、これから学びというのは、教師がまず『学びというものは何か』の意味を問い、それを学生に語り、学びの面白さを学生に語るということが大事になっている。そのときに語るためには、学びについてのフィロソフィに触れた方法論が先生方に必要であり、それがなければ『学びのよさ』を伝えることができない」と語った。木野教授の話しと、授業のパラダイムの転換が必要であるとする点で共通していたのが印象的であった。

6日は、第4ミニシンポジウム「新任教員研修プログラムの構築と実践」に参加した。参加者は、7、80名であった。シンポジストの話し(川島啓二(国立教育政策研究所高等教育研究部総括研究官)、林久夫(龍谷大学理工学部教授)、沖裕貴(立命館大学教育開発推進機構教授)、井上史子(立命館大学教育開発推進機構講師))は、それぞれ興味深く参考になった。また、質疑応答の中で、参加者の所属する多くの大学で、新任教員研修を実施していること、その際、国立教育政策研究所作成の「新任教員研修プログラムの基準枠組み」を参考にしていることがわかった。本学でも、来年度から新任教員研修を3日にかけて実施することにし、その充実を図っているが、今後は、全国私立大学FD連携フォーラム(本学会員校)のホームページにアップされることになっている新任教員対象実践的FDプログラム、オンデマンド講義等を活用について検討していきたい。

e-Learning で授業を楽しくしよう

飯田順三（法学部教授）

2011年3月5日（土）～3月6日（日）に京都外国語大学で開催された第16回FDフォーラムに参加する機会を与えられたが、実は、私の期待していたのは（怒られるかもしれないが）、総合テーマ「組織的FDの取り組み～FD義務化から現在（いま）～」ではなく、2日目の第3分科会で予定されていた『教育手法としてのe-Learningの可能性』であった。

2008年4月にはFDが完全義務化され、今や大学界はFD花盛りである。近年の大学教育の大衆化によって、偏差値が下がり続けても入学者を確保しなければならず、以前にも増して多様化する学生に対して、どう教えるかが課題となってきた。

研究を行うのが大学教員の本分であり、研究無き教育は大学教育とは無縁であると自覚（錯覚？）してきたわれわれ（私）にとって、研究時間を割いても教育にエネルギーを注がねばならない時代に入った。確かにこれは（大袈裟に言うと）学問の衰退である。しかし、シンポジウムで某氏が指摘したように、黒板と会話する教員では、いくら内容が高度で学問的に優れていても、学生は携帯電話をいじりながらツイッターに没頭して講義に見向きもしなくなるのだ。

私も、教室のど真ん中に座っている学生が熱心に携帯電話とじゃれ合って、こちらを向いてくれない経験があった。黒板に話していたわけでもなく、別段難しい話をしていただけではないが、退屈な講義と感じるのだろう、増え続けるこのような学生にどのように対応すればいいのか。彼にとって「退屈な講義」をどう変えるか。まさに、研究を本分として来た（おそらく大半の）教員にとって、否が応でも、「新+新人類」の学生にどう教えるかを真剣に考えざるを得ない時代に入ったのであり、FDはもはや「当然の法理」となったのである。もっとも、第3分科会で放送大学ICT活用・遠隔教育センターIDアドバイザー内田実氏が指摘したように、教員が常に教え方に腐心するならば、そもそもFDは不要であるかもしれない。ましてや、「組織的FDの取り組み」などと仰々しく構えることは、米国の大学教員から見ると、はなはだ滑稽に映るだろう。

ケイタイとゲームとインターネットが乳母同然であった彼らに、いかに教えるか。ここ数年悩んで来た私は、第3分科会を聞き（かろうじて）希望がわいてきた。分科会は『教育手法としてのe-Learningの可能性』がテーマであったが、私にとっては、可能性どころか、これしかないと合点した。特に、愛媛大学の富田英司氏の示してくれた具体例は、教える側の私がワクワクするようなものであった。Moodleの利用もさることながら、「テキストの読みを深める『マンガ表現法』Voicing Board」を活用しないわけにはいかなかった。さらに、内田氏の分かりやすい説明で、不勉強な私がインストラクショナルデザイン（ID）とは、今後の大学人にとって必要不可欠な概念であることが認識できた。IDと学士課程教育やIDデザインプロセスなどの関連図は、今後の私の教え方に決定的に影響を与えた。その意味で、第3分科会は私の期待したとおりに有意義な内容であった。分科会の余韻を心

地よく感じながら、帰京の車中で、この科目は Voicing Board を使ってどう教えたらいいだろう、こっちは Moodle がいいかもしれない、などとあれこれ考えている自分、教えることが楽しく感じられつつある自分を再発見したのであった。

初年次教育等における話す力・コミュニケーション力の育成

小島信泰（法学部教授）

はじめに

大学コンソーシアム京都が主催する FD フォーラムへの参加は、報告者にとって今回で二回目であるが、FD 義務化と昨今の大学社会の変化による影響もあってか、フォーラムの規模の拡大や参加者のさらなる熱気が強く感じられた。今回の第 16 回フォーラムの参加者は 900 名を越え、いままでのフォーラム参加者はのべ 1 万名を越えたとのアナウンスが開会の挨拶でなされた。

本報告では、プログラムの第一日目に行われたシンポジウム「組織的 FD の取り組み—FD 義務化から現在（いま）—」および第二日目に行われた「ミニシンポジウム&分科会」から報告者が参加した【第 3 ミニシンポジウム】「初年次教育等における話す力・コミュニケーション力の育成」の内容について、報告者が特に感じた諸点を記すことにしたい。

【シンポジウム】「組織的 FD の取り組み—FD 義務化から現在（いま）—」

シンポジウムは 4 名のシンポジストの報告を基調として、シンポジスト間の討論およびフロアからの質問にシンポジストが答えるという形式で進められた。このシンポジウムでは、組織的 FD がなぜ必要なのかというテーマについて具体的な実践報告を交えて議論が行われたが、現在でもまだ FD が教員・職員・学生の三者それぞれにとってまだ自己の問題として主体的に受け入れられていないことが確認されたのが印象的であった。そこで、主体的な FD への取り組みをいかに拡大させるかという課題および今後のあるべき FD に向けて、いまこそ英知を結集する必要があることが話し合われた。

具体的な FD の取組としては、合宿 FD の開催、教学と経営の協力による FD の促進、学内の教育開発センターの活動、FD 学生スタッフの設置などについて報告がなされ、各大学による多面的な FD が推進されていることが報告されたが、担当者の変更があった場合にも継続的な組織運営を可能にするにはどうしたらよいか、といった深刻な課題が提起された。

最後に、個人の関心や努力では充実した持続可能な FD を推進することができないことが確認され、今後のさらなる工夫とフォーラムにおける検討作業が必要なことが申し合わされた。

【第 3 ミニシンポジウム】「初年次教育等における話す力・コミュニケーション力の育成」

出席者参加型のシンポジウムであったことから、終了間際まで実に活発な議論が行われた。従来の支配型の授業からパラダイム・シフトしていわゆる参加型・支援型の授業にするにはどうしたらよいか。そのためにはなんといっても話す力、コミュニケーション力が必要であることが、4 名のシンポジストによって報告された。海外の先端的な理論研究

の説明や具体的な実践例の紹介があり、シンポジウムのテーマの現状と課題がよく整理された内容であった。

出席者も小グループを組んで、自己紹介や初年次教育の阻害原因について話し合い、その内容を他のグループに伝え、最後に担当のシンポジストが整理するという作業を通して、コミュニケーションの実践と難しさを痛感できる会議であった。

教員・職員・学生の各サイドからの主体的な取り組みがなされなければ、初年次教育の充実は期待できないが、そのためにまずは教員として具体的な工夫を行うことから始めなければならない。そのために今回体験できたグループ学習を自らの授業にも取り入れる必要があると思った。

おわりに

今回のフォーラムでは、自分の所属する専門学会の会員とも会場で出会い、日ごろ話したことの無いお互いの大学のFDの現状についても意見交換することができた。この事実が象徴されるように、今までは一般に自分のものと考えられていた授業が外に開かれ、大学内外の関係者との交流、創意工夫によってより充実した内容のものにしていかなければならないことを知った。こうした意識改革のため、そして具体的なFDの実践を学ぶために、今後も積極的に大学コンソーシアム京都が主催するFDフォーラムに参加していきたい。

初年次教育等における話す力・コミュニケーション力の育成

高橋 正 (文学部教授)

この度は上記フォーラム(3月5-6日)に参加させていただきありがとうございます。今後の文学部FDでも検討可能な項目を中心に報告させていただきます。

第1日目 シンポジウム 組織的FDの取り組み～FD義務化から現在(いま)～

このシンポジウムで興味深かったのは、京都外国語大学が行っている夏期専任教員研修会でした。琵琶湖畔のホテルで1泊2日で泊まり込みで行われるもので、宿泊FDとか学外FDと呼ばれています。報告者の京都外国語大学の平山氏によれば、後期が始まる1週間前ほど前に行われる午前中の教授会の後に、そのままバスに乗り込みホテルに向かい研修を行うということです。

プログラムは、初日の午後には「外部講師を招いての講演会」や「学内教員によるパネルディスカッション」を行い、夜には教員がテーマを自由に決めて議論できる場「ラウンドテーブル」の会議を行う。2日目には5つの分科会を行い、最後にその報告会を行うというものです。

また、冬期専任教員研修会(2月)も行われており、こちらも教授会の終了後に、発表やグループディスカッションを学内で行うということです。

文学部では、授業見学会を行っていますし、大学全体でもFDを行っています。学部で教員研修会を行うともっと身近な問題で議論できるのではないかと思います。それによって、学部内や専修内での問題を共有でき、解決方法も共有できる機会にもなります。教員間の意志疎通をよくするためにも有益ではないと思います。宿泊FDも出張経費で参加可能になれば有志から初めることも可能ではないかと思います。

さらに、注目したのは、立命館大学の木野茂氏の発表でした。学生と共に組織的FDを行うという考えでした。授業の改善を、学生と意見を交換しながら双方向で進めるという試みです。教員が良かれと思って行った改善が学生には不評ということがあります。学生の意見を聞かないと教員の独りよがりとなってしまう。そういった意味で、学生からの意見も十分に聞ける機会が組織的に設けることができるとよいと思います。文学部では、学部協議会や授業改善の協議会がありますので、さらにこれらの機会を増やし、充実させるのがよいのではないのでしょうか。学生の側にも自分たちで授業をよくしているという意識があれば、通常の授業の取り組みも変わってくると思います。

第2日目 第3ミニシンポジウム

「初年次教育等における話す力・コミュニケーション力の育成」に参加して

このシンポジウムでは、京都精華大学の山田氏の報告が特に有益でした。学生

が大学に来なくなる原因として次の4つの阻害要因がある。 他律感：ほかの人に言われてやっている、やらされている、親に進められて大学に来たという感じを持っている場合。 不信感：大学教育に不信感を抱いている。 疲労感：人間関係やバイトなどで精神的に肉体的に疲れている。 不安感：親などの期待に添えない、自分には力がない。 この中でとくに重要なのは他律感で、何かを演じているという感覚をどうするかということである。 他律的な尺度を採用して自己決定の機会を持っていない。 初年次教育や学業不振に陥っている学生には、自らの意志で専門分野を選び、人間関係を選び、その結果として自律的に納得をして将来の生き方を選び取るように支援、動機づけることが大事であるという趣旨の発表でした。

創価大学に当てはめると、親に言われて創価大に入学した学生や付属校から推薦でエスカレータ式に大学に来た学生に他律感を抱いているものがあるのではないかと思います。 また、先輩から言われたのでやらされているという感覚をもつことも多いようです。 文学部では1年の後期に専修選択を行います。 その時点でも、自分が何を学びたいかよくわからずに近い友達の希望をする専修に行くという現象もみられます。 そのような学生には、自分で決めるという自律を促し、授業や大学での活動が楽しいと感じることのできる状況を作ることができるように指導することが大事であろうと思われます。 ある活動が楽しい場合は自律感を抱いているときであるからです。

次に、ファシリテーションを導入した授業の実践を紹介された京都産業大学の北村氏の発表も今後の授業の参考にできることが多く、興味深いものでした。 ファシリテーションとは、自律的な課題解決を促すために、「プロセスの策定」、「意見の引き出し・受け止め」、「合意形成の支援」を行うことであると定義されています。 要するに、問題解決に向けた少人数のグループワーク、共同学習のことです。

この北村氏の発表では、少人数のグループワークをいかに行うか実際にその場で実践しました。 会場で近くに座っているほかの大学の教職員と3-4名のグループをつくり、アイスブレイクや課題共有のために話し合いを行った。 さらに、各グループの課題を共有するために、グループの一人が隣のグループに行って、議論の内容を伝えたり、課題を共有するために、太字のマジックインキとB4の紙を用意し、グループで議論になった要点を書き、それをグループの一人が他のグループの人に見えるように掲げたりするなど、実際の授業で具体的にどのようなするのかが分かり、4月からの授業で取り入れたいと考えています。

このフォーラムに参加して感じたことは、創価大学のFD活動は充実している方で、意識の高い教員も多い方であるが、ほかの大学でも、一生懸命に、様々な試みを行っており、このような機会にそれらを学び、吸収していかなくてはならないということです。 このフォーラムに参加して学んだことを今後の学部でのFD活動へ微力ながら活かしていけたらと思いますし、自分の授業でも活用していきたいと思います。 フォーラムへの参加の機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。

FDの本丸は教員の意識改革・授業改革

—ミニシンポジウム「学生とともに進めるFD」に参加して—

杉山由紀男（教務部副部長・文学部准教授）

2日間にわたって行われた「大学コンソーシアム京都」主催の「第16回FDフォーラム」に参加させていただいた。主催側の発表では900人を超える参加者であり、16回の参加者合計が1万人を超えたとのこと。関心の高さが年々水嵩を増していることが伺えた。確かに、初日のシンポジウムをはじめ2日目のミニシンポジウムなどでも、シンポジストやプレゼンターの熱心な発表と、矢継ぎ早に出される多くの質問・討論の中に、大学教育改革に対する参加者の関心と悩みと模索と実践のすべてを含みこんだ一歩前進への息吹のようなものが強く感じられた。初日のシンポジウムについての報告は他の方に譲るとして、ここでは、参加した2日目の第2ミニシンポジウム「学生とともに進めるFD」について簡単に報告したい。

今回のフォーラム全体のテーマは「組織的FDの取り組み」であったが、この第2ミニシンポの趣旨は「大学の中の重要な構成員であり、教育を受ける当事者の学生もFDの主体」（配布パンフレット）との観点に立った教・職・学の連携による組織的なFDの推進というところにあったと解する。そのことは、1時間の昼休みを挟んで午前10時から午後3時半まで行われたこのミニシンポが、コーディネーター役の木野茂立命館大学教授の報告をはじめとする5大学すべての報告に学生のプレゼンテーションが含まれていたこと、否、学生のプレゼンを中心にセッションが進められ、教職員の報告はそれを補足する内容であったことに現れていた。まさに形式的にも内容的にも「学生とともに進めるFD」であり、さらにいえば「学生がリードするFD」であったとあってよい。因みに木野教授によると、このミニシンポセッションへの参加は107大学・機関である。いま当日の内容と配布資料から、事前に発表されていたプログラムを補って各報告題目を紹介すると次のとおりである。

- ① 「学生とともに進めるFD」（立命館大学共通教育推進機構 木野茂教授）
- ② 「学生FDサミット（第1回から3回）の報告」（立命館大学学生FDスタッフ）
- ③ 「追手門版学生FDスタッフ 現況と課題」（追手門学院大学教育研究所 梅村修教授および学生FDスタッフ）
- ④ 「アカデミック・コミュニティにおける『リア充』の実現をめざして」（法政大学社会学部メディア社会学科 大崎雄二教授および学生「HART*コミュニティ」スタッフ）
- ⑤ 「大阪大学におけるパンキョー革命 —学生・教職員懇談会の成果・課題・展望—」（大阪大学 大学教育実践センター 服部憲児准教授および「パンキョウ革命推進チーム」学生メンバー）
- ⑥ 「『京都文教入門』から 大学を変える、学生が変わる！」（京都文教大学臨床心理学部 平岡聡教授／共通教育担当部長、村山孝道教務課係長、およびFSDproject 学生メンバー）

まず、上記①②の報告では、2年前の当フォーラムで「学生と進めるFD」分科会が初めてもたれ、その際立命館大学の学生FDスタッフが大学を越えた学生FDサミットの開催を提案して以降の取り組みの様相が紹介された。その中で、現在までに同サミットを3回開催し、「大学を変える、学生が変わる」をコンセプトに、「ヘンな授業の改善法」などの多くのテーマで“しゃべり場”をもち、現在参加校は30大学にまで拡大していること、その意義と展望などが報告された。続いて③報告では、追手門学院大学が行っている学生と教員の意見交換の場作り、意欲的な授業を展開する教員の取材・紹介、学生発案形授業実現への取り組みなどの活発な活動の様相が報告された。この学生・教員の意見交換の場について私も質問したが、個々の授業改善にはまだ必ずしも結びついていないものの、参加者は大いに充実感と開催の意義を実感しているとの答えであった。次に④報告では、日本の法律が学生を大学の構成主体に含めていないことを指摘、しかしまた大学における学生参画には法的根拠があることも指摘し、法政大学社会学部における教学改革とそれへの学生の関わりについて紹介された。とりわけ学生スタッフからは、同学部におけるゼミ紹介パンフの作成とゼミ説明会、学部研究会の運営などが学生によって主体的に行われていることが紹介された。また⑤報告では、大阪大学における共通教育のより良いあり方を共に考えていくための「学生・教職員懇談会」(年1～2回開催)について、企画運営段階から対話型・学生参加型のFD・SDを目指して活発に活動していること、併せてFDの意識・成果がまだまだ全学に行き渡っていないなどの課題についても報告された。最後に⑥報告では、初年次の導入教育改革の事例として、京都文教大学の自校史科目「京都文教入門」が、初年度は役職教員の持ち回りで坦々と進められ不人気だったため、FSDprojectメンバー(Faculty, Student, Staff 有志)と受講を終えたばかりの1年生が立ち上がり、この科目を“おもしろくしたい”と、学部長対談「恋愛」、著名人の講演会、京都や地元の宇治、大学やクラブ活動などの紹介を含むプロジェクトPRフェスタ・FSD企画コマなどを企画・実施し、受講者・参加者に非常に大きな反響を呼んだことなどが紹介された。

紙面の関係で一つ一つの報告について詳細に取り上げることができないのが残念であるが、各大学ごとで取り組みの内容や進捗、あるいは各学内における学生FDスタッフの組織上の位置づけなどに違いはあるものの、いずれの大学の報告においても、学生メンバーが自分たちの活動に様々な苦心とともに充実感を、さらにいえば喜びさえ感じながら、大いに張り切って、時にユーモアを交えて自信に満ちたプレゼンを行っていたのが実に印象的であった。そこには“やらされている”感はまったくなかった。初日のシンポジウムに続き、ここでも共通のコンセプトは「教・職・学三位一体で進める組織的なFD」であった。

翻って本学は、「学生参加」「学生中心の大学」という創立者の建学の理念のもとに開学し、学費問題などの経験をとおして、早くも1974年には教・職・学・理が大学の様々な問題について毎月協議を行う画期的な「全学協議会」をスタートさせ、大学運営における学生参加の原則を確立する制度的な仕組みを作った。この協議会のもとに「建設委員会」や

「交通安全委員会」、「授業改善委員会」などが順次作られ、大学の物理的環境の改善、管理運営のシステムの改善、研究・教育の制度や内容の改善などに、学生が主体的に提案したり意見を述べたりすることのできる通路が開かれている。「授業アンケート」も最初は学生自治会が独自に行ったものである。また、各学部単位でも学生からの提案で同趣旨の「学部協議会」が作られ、年1~数回開かれている。因みに文学部の協議会では、昨年・本年と学部の初年次必修科目「基礎ゼミ」と「人間学への招待」をテーマに“しゃべり場”がもたれ、学生側から貴重な意見が多数出され、その一部はシラバスに反映させるなど、授業改善に活かされている。また、文学部の「講座人間学 A・B・C」や共通科目の「21 世紀文明論」なども学生の提案によって開設された科目である。さらに、法政大学から報告のあったような学生によるゼミの紹介等の試みは多くの学部で行われてきたし、学生が運営に参画する形で、合同ゼミ発表会や卒論発表会なども行われており、ある面ではどの大学よりも先駆的な側面を持ってきた。

これに対し、大学としてもカリキュラム改革をはじめ、授業アンケートの実施、教育学習活動支援センター (CETL) の設置、全学・学部の FD 委員会の発足とその活動など、教学面で多くの改革を行ってきた。しかし、もちろんのこと課題はまだまだ沢山ある。そして、今回の FD フォーラム、とりわけ第 2 ミニシンポに参加して感じたことは、FD の本丸は教員の意識改革と授業改革による大学教育の質保証であり、そのためには「学生とともに進める」あるいは「学生参加による」FD という理念の全学的な共有とそれに基づくより組織的な FD の実行が不可欠であるということである。これこそが本学にとっても重要な課題であると感じた。そしてその実現のためには、学生の参画をどのような形でより良く実現するのかなどについて全学的にさらに体制を整えなければならないことはもちろんであるが、なんと言っても Faculty の原点に立ち返って、各学部・学科の教員組織と個々の教員の意識を「学生とともに」という確かな基盤の上において FD を進めていくことが重要であろう。教員組織や教員個々の努力だけでは限界があるように思う。学生とのいい緊張関係と協力関係の中でこそ FD は進むと感じる。もちろん授業アンケートの実施なども「学生とともに」進める一つの形ではある。しかし、授業の満足度といった学生の主観的な評価に留まらず、授業や教育活動の価値をより高め、それを客観的に測定して、その質を保証していくには、学生参加型の授業をはじめ、さまざま形式と内容で学生の参画をより良く前進させなければならないと感じた次第である。

上で触れたように、幸いなことに本学には「学生中心」という創立者の確かな理念とそれに基づく良き伝統がある。あとは、自戒の念を込めて、教員組織と個々の教員の側からの意識改革と実行あるのみと思う。今回のフォーラムに参加した沢山の大学や報告をした先駆的な取り組みをしている大学のすべての関係者の表情には、生き残りをかけた真剣さあるいは深刻さと言ってよい緊張感が漂っていた。それにつけても、「学生中心の大学」という創立者の理念の先駆的な正しさを実感するとともに、その理念をさらに実質化することこそ、私たち教職員の課題であり、使命であると強く感じた次第である。

実効ある FD を協力して盛り上げよう

鈴木 将史 (教育学部教授)

3月5・6日に開催された2010年度第16回FDフォーラム(主催・大学コンソーシアム京都)に参加した。今回の全体テーマは「組織的FDの取り組み～FD義務化から現在(いま)～」となっており、2008年度にFDが義務化されてから3年を経た現在、大学におけるFD活動の現状を検証するとともに、今後取り組むべき課題を考えることを目的としている。

◎第1日 シンポジウム(13:00～17:15)

高橋伸一氏(京都精華大学教授)をコーディネーターとし、4名のシンポジストが約30分ずつ報告を行ったのち、質疑応答、討論を行うという内容であった。

1. 平山 弓月氏(京都外国語大学外国語学部教授)「FD実践(教員研修)」

京都外大におけるFDの取り組みのうち、特に教員研修に焦点を絞った報告であった。組織的FDの実践を①夏期専任教員研修会(学外FD、宿泊FD)、②冬季専任教員研修会(学内FD)、③「授業担当者連絡会議」、④「授業評価アンケート」の4つに分けて紹介した。

報告の中では、②のいわゆる「宿泊FD」が印象的であった。これは毎年夏休み終了時に専任教員が琵琶湖畔に泊まり込み、アルコールなしで講演会や分科会を行うもので、日本人専任教員のほとんどが参加しているとのことであった。教授会員の数が100名程度という規模の大学だから実現できるとも言えるが、全教員が2日間を共有してFDについて考えるという試みには感心させられた。ただ、言語の問題から外国人教員の参加はわずか1名とのことで、外語大としては不十分なのではないかとの懸念も持った。

④授業アンケートを例外なくすべての授業で実施していることには感心したが、手書きのアンケートを学生に集めさせているというような状況で、実施形式や内容については、本学の方がかなり進んでいるのではないかと感じた。

FD活動の問題点について「日常業務外で負荷が大きい」「一部の人間に偏りがち」「専門家とみなされ外部業務が来る」「専従職員不在でできないことが多い」などと認識していたことは参考になった。

2. 木野 茂氏(立命館大学共通教育推進機構教授)「FD実践(授業改善)」

物理学から環境問題、さらに大学改革へと研究分野を広げた木野氏による、自らの研究歴を振り返りつつFD活動、特に授業改善活動の本質を明らかにしようとする報告であった。

1970年代から東京大学の故宇井純氏が行った自主講座こそが授業改善FDの先駆けであったとし、教員と学生の間には本質的な違いはないとの考えのもと、学生とともに授業を作った当時の取り組みを紹介した。さらに木野氏は「授業アンケートはコミュニケーションではなく、あくまで調査である」とし、「教職学の三位一体で授業改善を推進しよう」と呼び

掛けた。

確かに授業改善のための方法はいろいろあるが、形式のみ整えれば自動的に授業が改善されるというわけではなく、最も必要なのは、真理を求める探究心を学生と共有することであるとの論旨には説得力があった。氏が紹介した立命館大学等の学生FDの取り組みは参考になるもので、本学でも十分に組みこめる活動であると感じた。

3. 山田 剛史氏（島根大学教育開発センター副センター長／准教授）「アセスメントの効用」

教育開発の専門家である山田氏による、アセスメントを有効に活用したFD推進についての発表であった。組織的なFD活動を効果的に推進するためには、その効果を各段階において測定・評価することが必要である。それについて氏は、「学生が受ける教育経験の結果として、知り、理解できることをさらに深い理解へと発展させるために、複合的かつ多様なソースから情報を集め議論するプロセス」とするアセスメントの定義を紹介した。

PDCA サイクルにおける Check 段階の意義、学生の入り口・中間・出口における様々なアセスメントや、様々なレベル・対象に対する調査などについて分析的に述べられ、本学での調査実施についても大変参考になるものであった。

ただ、プレゼンテーションとしては、各シートにあまりにも多くのことが書かれていて十分に追えず、情報は豊富だが焦点がぼやけた印象があった。

4. 池田 輝政氏（名城大学副学長／教育担当理事）

本学のFDフォーラムでも講演をされた池田氏から、名城大学副学長として大学全体のFD活動の指揮を執ってきた経験を通して報告がなされた。

私たちは普段、大学の構成員としてFD活動に参加し、そのスタンスは人それぞれであるが、組織的FD活動を効果的に推進するには、推進者のリーダーシップが大切である。トップ、ミドル、ボトムという図式に整理して語られた内容には、経験に基づく説得力があった。

特に「キャリア成長には組織による動機づけと支援策が不可欠である」「組織的FDを進めるにはトップのリーダーシップのもとに組織される意欲的なミドルが必要」との言葉は大変参考になった。

シンポジウム全体を通して

「FDの義務化」という言葉にも象徴されるように、FD活動にはどうしても「義務としてやらされるもの」「いやいやながら協力するもの」というイメージがあり、その立場にある一部の人に仕事が集中するきらいがあるが、本当に効果のある活動を行うためには、組織全体で前向きに推進していくことが不可欠である。

今回のシンポジウムに参加して様々な立場からの報告を聞き、今後組織的に効果的なFD

を推進していくためには、FD活動そのものに価値を付与し、職員や学生も参加した創造的・学問的活動にしていかなければならないと感じた。本学でも、FD推進組織のあり方、推進状況の評価方法も含め、全学的に検討・改善を進め、真に意味のある、全学的に取り組み甲斐のあるFD活動を創造していくことが大切であろう。

なお、当日の質疑応答の中で、会場から「FDという言葉には、教員である我々の研究を充実させるという方向も含まれていると思う」という発言があった。従来大学においては研究と教育を区別する見方が強いが、木野氏の発表の中で紹介された、宇井氏の「学問の前では教員も学生も同じ」という言葉は大変示唆に富んでいると思う。いささか理想主義かもしれないが、学問を真剣に愛し、それに対して教員と学生が心を合わせて取り組む時、教員の研究も増進し、学生への教育も充実するのであり、それこそがFD活動の目指すべき姿であると思う。

◎第2日 (10:00~15:30)

2日目は4つのミニシンポと9つの分科会に分かれて意見交換が行われたが、私は第1分科会「文系学生に対する数学教育」に参加した。

ここでは葛城大介氏(京都薬科大学准教授)と黒宮一太氏(京都文教大学講師)をコーディネーターとし、3名の報告ののち討論が行われた。

1. 芳沢 光雄氏(桜美林大学リベラルアーツ学群教授)

数学教育に関する様々な著書もある著名な論客である芳沢氏より、私立大学文系学部の学生の数学力が非常に低くなっていること、その原因が初等算数教育の失敗にあること、背景として算数能力の低い小学校教員が大変多いこと等について、具体的な例を示しながら報告された。

芳沢氏は所属する桜美林大学で、単位外の算数の授業をボランティアで行っているが、そこでの状況がいくつか紹介された。具体的には、「時速20kmで5時間進むとき、すすんだ距離を求めよ」という問題に対して「4km」と答える学生がかなりあるという。これは小学校時代に意味内容を考えず「みはじ」とか「はじき」と呼ばれる図式にしたがって形式的に問題を解いていたのを、適用を誤って掛け算を割り算にしてしまったものである。また、「 $40 - 16 \div 4 \div 2 = ?$ 」というような問題には2割の学生が誤答を示すという。これも計算の順序のルール徹底や「 $16 \div 4 \div 2$ 」という3つの数の計算練習が不足していることによる。

これらは特に初等教育において、「答えだけ当てればよい」という「試験至上教育」が行われ、プロセスや応用がないがしろにされていることによるとの指摘であった。

芳沢氏の話は学習指導要領や就職試験、教員養成など多岐に及んだが、同様に私立大学において文系学生に対して数学を教育する立場にある私にとって、常々実感し、主張していることと重なる点が多く、いちいちうなずける内容であった。

2. 桑田 孝泰氏（東海大学教育研究所教授）

桑田氏は大手予備校で10年ほど数学を教えたのち、思い立って渡米、Ph.Dを取得したのち帰国され、東京電機大学を経て昨年度から東海大学教育研究所で研究教育を行っている方で、実はカンボジアへの数学教育支援を通して、私とは以前より知り合いである。

「文系学生に数学を面白いと思わせればその影響力は大きい」、さらに「教員養成の数学は国全体に影響する」との主張はなかなか的を射ていると感じた。

その上で、文系学生に対して数学を面白いと思わせる授業の展開について具体的に手法が提案された。具体的には、①導入に力を入れ、学生を引き付けること、②学生自身に考えさせ、発見させること、③教具を活用すること、などで、本学の授業でも大いに参考にしていきたいと感じる提案であった。

3. 岡本 真彦氏（大阪府立大学人間社会学部准教授）

岡本氏の専門は教育心理学であり、「小学生の算数の問題解決」を研究されている。

氏の所属する大阪府立大学では、2012年度から文系学生にも線形代数や微積分などの数学を必修にすることにしているが、文系学生の数学理解について、具体的な調査に基づいて報告された。

氏によれば、文系学生には「論証」などの単元について有効性の認識が低く、方程式などの数式表現、グラフなどの図形表現と言語的表現の間の形式の変換が苦手であるという。そのため数学教師が発するさまざまな表現の間を結びつけることができず、教師が「 $3x+1$ 」と表したものを「3倍して1を足す」というように理解することが困難となる。いわば言語間の翻訳ができないような状況である。その結果「何がわかって何がわからないのかもわからない」というようなことが生じる。この現状を克服するには、教師側がこの状況を理解して、3つの形式のすべてを使って説明すること、同じようなレベルにある学生自身が宿題を作って解きあうことなどが効果的であると述べた。

数学は言語によらずユニバーサルなものであるが、だからこそ、数式を理解できるようになるまでの段階においては、言語表現との関連を常に意識しながら教育することが重要であると感じた。

分科会全体を通して

前日の「組織的FD」は問題が複雑かつ大きすぎて、個人で何ができるか不安を覚えるほどであったが、それに比べ2日目の分科会は、いわば同じ境遇にある、「同業者」の集まりであったため、それぞれの考えがとてもよく理解でき、共感もできた。

本学では2011年度から初年度教育として共通科目の数学に力を入れ、数学検定も導入しようとしているが、他の大学も非言語能力で就職試験に苦勞するというような共通の課題を抱えていて、それぞれが打開策を模索している状況であることがよくわかった。

本学の取り組みもじっくりとその効果を検証すべきものであるが、あくまでも学生のためを考え、今後も不断の努力を積み重ね、このようなフォーラムで発表できるような成果を出していきたいと感じた。

「さて、どうするか」

池口 雅道（工学部教授）

3月5日、6日の両日、京都外国語大学を会場として開催された大学コンソーシアム京都主催の第16回FDフォーラムに参加した。初日は「組織的FDの取り組み～FD義務化から現在（いま）～」と題した全体シンポジウムで900名以上の参加者が一同に会して4名のシンポジストの講演を拝聴した。

最初はホスト校、京都外国語大学の平山弓月教授が、京都外国語大学での宿泊FD、授業アンケートの事例報告をされた。宿泊FDに関しては全員参加を押し進めるには有効なようであったが、経費は大学負担とのことで簡単には真似出来ないかもしれない。授業アンケートに関しては10回目の授業あたりで実施し、結果を受けてなお2、3回の授業が行えるスケジュールで行っているそうである。本学でも導入可能性を検討してみるのも良いかもしれない。

二人目の演者は立命館大学教育推進機構の木野茂教授で、話の冒頭で戦後の大学進学者数のグラフを示しながら、大学進学率が10%程度であった昭和30年代と大学進学率が40%を超えている現在とではパラダイムシフトが必要であること、知識供与型の授業ではなく、学生とともに作り上げる双方向型授業が有効であることを主張された。このお話を伺いながら思ったのは、双方向型授業は教える内容と学生の学力に格差がなければ普通に成立するのではないかということである。考えるべきは大学の授業内容かもしれない。しかしながら、ここには「大学ではこれぐらいのことを教えるべき」という『常識』は何かという問題がある。現代社会に生きている人間がそれぞれの視点で大学教育とは何かについて漠然とながら『常識』を持っているであろう。それらの最大公約数的なところを把握する作業が必要と感じた。

三人目の演者は島根大学教育開発センターの副センター長である山田剛史准教授で、様々なデータを用いたアセスメントについて講演された。非常に重要と感じたのは卒業時の学生の評価である。本学においても入学時にはプレイスメント・テストやTOEIC-ITPテストを実施しているが、卒業時にも同様な基本的能力を測るテストを実施し、4年間でどれだけ学生が成長したのかを把握することが大学として不可欠となっていくと感じた。

最後は名城大学・副学長の池田輝政先生が大学教育開発センターなどのFD活動をマネージメントする組織の役割について講演された。講演終了後には質疑応答の時間が設けられたが、時間が限られているのと、会場も大きいので残念ながら活発な議論とまでは至らなかったように思う。

二日目は4つのミニシンポジウムと9つの分科会に分かれて議論が行われた。私は「グローバル化とこれからのキャリア教育」と題したミニシンポジウムに参加した。筑波大学大学院人間総合科学研究科の岡田昌毅教授、早稲田大学政治経済学術院の白木三秀教授、立教大学大学院ビジネスデザイン研究科の渡辺三枝子教授が講演された。

岡田教授の講演では身近な人にキャリア・インタビューをさせ、それを題材に授業を展開している例が報告された。岡田教授の職場は夜間社会人大学院であり、インタビューの対象者を確保しやすい面はあるが、インターンシップよりもずっと効果的とのことである。

白木教授は 2008 年から 2009 年に行った日本企業の日本人海外派遣者に対する現地従業員の評価調査のデータによると、現地人の上司に対するものに比して悉く評価が低いことを説明され、グローバル化の時代において大学において何をすべきかのお話をされた。学生のうちに海外を意識すること、経験することの重要性を説かれ、英語で講義する、語学教育において海外経験を必須とするなどを提案された。

渡辺教授の講演で印象に残ったのは、医大、音大など高度に専門的な大学において、専門家になることを断念した学生に対するケアが必要だのお話である。工学部にも参考になるお話である。数値データとして把握していないが、入試の面接や入学後の学生との話の印象からは工学部入学者のかなりの割合が少なくとも入学前後においては研究者を夢見ている。一方で研究職に就けるのは一握りの学生であるのも事実であり、在学中の学生に対して夢破れた時の方向性を示す必要があるだろう。

全体として、いろいろ考えさせられることは多かったが、問題は「さて、どうするか」である。少なくともそれを考えるきっかけになった点で意義ある出席であった。

“教育手法としての e-Learning の可能性”に参加して

石井良夫（教務部副部長・工学部准教授）

5日の全体シンポジウムに続き、6日には第3分科会“教育手法としての e-Learning の可能性”に参加したので、その報告を以下に記します。

この分科会では、午前中に以下の表題で三人の報告が行われ、午後には報告に関する種々の質問と回答、及び参加者も含めた議論が行われた。報告者とタイトル、簡単な内容は以下の通りである。（各報告者の表記をそのまま用いているため、e ラーニング、E ラーニング、e-Learning 等記述が異なっています）

1. 都筑英明（明治国際医療大学 医学教育研究センター）

“大学連携による e ラーニングシステムの共有共用化—ゼロからの e ラーニング—”

京都府の10大学・短期大学が文部科学省の戦略的大学連携支援事業を利用して e ラーニングシステムのプラットフォームを構築してきた過程について概括的に述べられ、e ラーニングの経験をほとんど持たなかった小規模な大学が大学間連携を通じて e ラーニングを導入した経験が紹介された。特に、報告者の大学が京都市内から離れており、遠隔地での授業に対する e ラーニングや遠隔講義による授業のメリットとデメリットを聞くことができた。

2. 富田栄司（愛媛大学教育学部教育心理学）

“日常の授業に根ざした E ラーニングの探求”

報告者の担当する講義・授業に関しての e ラーニングの具体的な取り組みについて種々報告された。特に日常の授業に浸透した形による展開可能な E ラーニングの実践方法として、教育学部の地域の核になる小学校教諭志望の学生が比較的保守的なことに鑑み、ICTの重要性について語られ、具体的にはオンライン・ディスカッションの導入や非常にユニークなテキストの読みを深める「マンガ表現法」の取り組みが紹介された。

3. 内田実（LBS 研究スタジオ代表/放送大学 ICT 活用・遠隔教育センターID アドバイザ）

“E ラーニング&インストラクショナルデザイン”

本分科会のテーマの一つである“e-Learning 科目はカリキュラム上どのような位置づけが相応しいか”について、単なるツールである e ラーニングの使い方について、メディアの分類軸、分析表といったより定量的な評価基準などが報告された。またもう一つのテーマである“e-Learning 科目の内容を設計するための手法とはどのようなものか”について、インストラクショナルデザインとその教育効果、効率、魅力について具体的な方法も踏まえて種々報告された。

午後の分科会では、様々な問題点、取り組み、方策などについて e ラーニングを実施している大学、取り組み始めている大学から様々な意見が出された。